

はじめに

数年前まで日本のBSテレビでも深夜に放映されていた、イギリスBBC放送の自動車バラエティ番組『Top Gear』は、月刊の自動車雑誌も発行している。雑誌は世界30か国で翻訳・発行されており、イギリス本国版の翻訳記事と、各国での独自制作の記事を組み合わせて編集されている。

僕は2015年から香港版と中国版に「Japanese Modern Classic Car Owners」と題した連載を始め、2016年から、その記事は台湾版にも掲載されるようになった。これは日本のモダンクラシックカー・オーナーを取材した記事だ。「モダンクラシックカー」というのは便宜的な呼び方で、あまり古臭くなり過ぎていないクルマというくらいの意味。戦前型よりも戦後型の方が読者に親しみを持ってもらえるだろうけれども、有名なクルマや独自性の高いクルマならば、戦前型でも記事化をためらうつもりはない。

「今ではどんなクルマでも、画像もスペックも解説も、インターネットで検索すれば簡単に見ることができる。でも、持ち主がそのクルマをどのような経緯わもで入手し、どんな想いを抱きながら乗っているかは、記者が取材した記事でないとうからない」

と、両誌の編集発行人を務めているエドモンド・ラウさんは言う。つまり、クルマそのものではなく、あくまでも持ち主とクルマの関係の独自性と普遍性を読者に提供したい、ということだ。

彼は1980年代から香港で雑誌編集のキャリアをスタートさせ、後に中国本土や台湾でも、それぞれの『Top Gear』を創刊し成功を収めてきた。自動車メーカーからも置かれており、世界中を飛び回っている。日本にもよく来ていて、各メーカーの事情にも詳しく、その論評も的確で説得力を持っていた。そして僕も、ラウさんの問題意識に全面的に賛同し、連載が始まった。

「中国はまだこれからだけれども、香港や台湾にはクルマを楽しむカルチャーが熟成されている。日本には、もっと幅広く色濃い自動車カルチャーがあるのではないか？ その人たちの記事が読みたい」

ラウさんと意気投合したのが2014年8月。場所は、中国の仏教遺跡都市である敦煌^{とんげう}。マクラーレン・チャイナが実施したシルクロード走破イベントで一緒になった時だった。

意気投合した後はメールで連絡を取り合い、僕は記事になりそうなモダンクラシックカーの持ち主を探し、コンタクトを取って候補者リストを作成して、ラウさんに送った。候補者についての質問が寄せられ、それについて画像を添付して答えるやり取りを続け、候補者リストを完成させた。その候補者リストの中に、この本の主人公であるワクイミュージアムの涌井清春さんが入っていたのである。

クラシックカーを自分好み^{あつら}に挑^{あつら}える

もちろん、候補者に挙げたのは僕だった。涌井さんとは数年前のクラシックカーイベントで知人から紹介され、数人で立ち話をしたくらいの面識しか持っていなかったが、ワクイミュージアムについては知っていた。「くるま道楽」というロールスロイスとベントレー専門の中古車店を経営していた涌井さんが、そのかたわらで個人的に収集していた逸品を公開したプライベートミュージアムだ。訪れたことはなかったが、開館時には自動車メ

ディアを中心にあちこちで紹介されていたため知っていた。

プライベートミュージアムには、ロールスロイスとベントレーの代表的なモデルが十数台展示され、両者の歴史を俯瞰ふかんできるような構成されていた。展示車はどれも稀少きせうなものだったが、中でも1928年のル・マン24時間レースに優勝したワークスカー、通称「オールド・マザー・ガン」は白眉だった。

涌井さんは日本人に縁の深いクルマの収集には使命感のようなものさえ抱いており、吉田茂元首相の補佐役として知られている白洲次郎しらすが戦前のイギリス留学時代に乗っていたベントレーや、吉田茂が戦後の日本で乗っていたロールスロイスなども収集していた。

クラシックカーを販売する会社の経営者と、クラシックカー愛好家という二つの顔を持つていたが、集めたクラシックカーを一人で眺めている愛好家ではなく、積極的にイベントに参加し、それらを走らせていた。もちろん、そこには宣伝の意味合いも含まれているのだが、経営者と愛好家を両立させている印象を僕は涌井さんに抱いていた。

クラシックカーやマニアックな輸入車を販売する店の経営者の中には、自分は前面に現れず、存在感を消そうとするタイプの者も少なくないが、涌井さんは正反対だった。

涌井さんにはラウさんも興味津々のようで、「中古車販売業者が長じてプライベートミュージアムを作るまでになった経緯とその想いを知りたいし、收藏されているクルマも見たい。それもロールスロイスとベントレーともなれば、戦後型よりもむしろ戦前型にこそ偉大な歴史が宿っているわけで、勉強させてもらおうつもりで取材して記事にしてくれないか」と返信メールが来た。ラウさんは昔のクルマにも詳しいので、やはりロールスロイスとベントレーともなれば別格なのだろう。

涌井さんに電話をして取材を申し込んだ。趣旨を説明し快諾され、取材日にカメラマンの田丸瑞穂さんを伴って、埼玉県加須市かそのワクイミュージアムを訪れた。巨大な倉庫や配送センターが並ぶ一角に、ミュージアム、販売する中古車展示場（ヘリテージ）、工場（ファクトリー）などが分散していた。

ミュージアムのテーブルにつき、趣旨をもう一度話して、取材を始めるつもりだった。こちらとしては、たくさんあるクルマの中から、ミュージアムを代表するような稀少で、自動車史上で重要な意味合いを持つものを重点的に撮影させてもらいたかった。收藏車の中では、1947年の「ロールスロイス・シルバーレイス」や、1954年の「ベントレ

1・Rタイプ・コンチネンタル」が、それにふさわしいのではないかと考えていた。

ところが、涌井さんから返ってきた答えは予想もしていないものだった。

「おっしゃる通り、その2台だったら誰からも異論はないでしょう。香港や台湾の専門家がいても異論はないはずです」

映画『用心棒』で主役を演じた時の三船敏郎のようなアゴヒゲを撫なでながら、涌井さんは表情を和らげた。

「2台でもいいんですけど、こちらではどうでしょう?」

別のクルマがよいのだろうか!?

「ロールスロイスの『シルバーシャドウ』というクルマです。ウチは最近、ビスポークというプロジェクトを始めまして、そのベース車両となるのがシルバーシャドウなんです。シルバーシャドウを取り上げていただけませんかでしょうか?」

実際には、もっと丁寧な話し方だったかもしれない。僕から申し出た2台ではなく、シルバーシャドウを記事の中心に据えてはどうだろうか?という提案だ。

「シルバーシャドウですか!?!」

シルバーシャドウなんて生産台数も多いから珍しくないし、最近のもの過ぎてモダンクラシックだなんて呼べない。ロールスロイスは品質が高いがゆえに長く乗り続けられることが多いから、1947年のシルバーレイスや1954年のRタイプ・コンチネンタルなどに較べたら、見劣りも甚だしい。

でも、目の前の涌井さんは、いいですよ？」と言わんばかりに微笑んでいる。どうしようか？

「コンディションのよいシルバーシャドウが、日本だけでなく世界中でまだまだ現役で走っているんです。シルバーシャドウは、エアコンとディスクブレーキが標準装備された初めてのロールスロイスだから、現代の交通環境下でも不安なく普通に乘れるんですよ」

なるほど、上手いところに目を付けたものだ。涌井さんの工場できちんと整備を受けたシルバーシャドウならば、日常の移動手段としても乗ることができる。ちょっと古めのロールスロイスを、足として乗るなんてカッコいいではないか。僕も余裕があったら1台仕立ててみたいくらいだ。

「それだけではなく、世界に1台、あなただけのシルバーシャドウを、誂えることがで

きるのです。クラシックカーの新しい楽しみ方として、これから力を入れていこうと考え
ています」

涌井さんはこれまでの顧客を満足させ続けながら、その一方で新しい展開を図ってい
なければならぬと強調していた。

「この商売を30年続けてきて、おかげさまで、ロールスロイスとベントレーのクラシック
カーならワクイミュージアム」と評価をもらえるようになりました。でも、次の段階に進
むためには、新しいお客さんや、最近増えている海外からのお客さんたちに、もっと積極
的に対応していかなければなりません」

歴史的に稀少なクラシックカーを、ただただ恭しく販売しているだけでは先がない。何
か新しいビジネスを考え出さなければならぬと生み出されたのが、このビスポーク・プ
ロジェクトだというのだ。

ビスポーク・プロジェクトとは、中古車として流通しているロールスロイス・シルバー
シャドウもしくはベントレー・Tを、仕立て直して販売する」というもの。修繕した中古
車を単に販売するのではなく、修繕する前の段階から顧客と涌井さんが話し合いながら、

好みの仕様に造り上げていく。走るための機能を新車並みに回復させた上で、ボディカラーや内装、装備品などを選び、場合によっては新たに造り上げて組み込んでいく。涌井さんと語らいながら、どんなクルマに仕立て上げていくかというプロセスそのものが楽しみとなっている。

オリジナル至上主義の最たるものであるクラシックカー、それもロールスロイスとベントレーを自分好みに改造して、実用の足として乗り回そうというのだ。クラシックカーの世界での常識を大きく上書きしている。画期的ではないか！

記事にするなら、そっちの方がはるかに面白くなりそうだ。誰もが仰ぎ見る、いわゆる「名車」と呼ばれるクラシックカーを、そのまま紹介したって意味がない。

僕が想定していたシルバレーリスやRタイプ・コンチネンタルなどよりも、涌井さんの新しい取り組みを伝える方がいい。それがラウさんの要請に応えることにもなる。

ミュージアムの芝生の上に1台のシルバードウを置いて撮影し、それを前にしてインタビューを進めた。ミュージアムを作った経緯やクラシックのロールスロイスとベントレーに寄せる涌井さんの想いを聞くことから始まり、今後のことにまで話は広がった。取

材は上手く運んだ。得てして、取材は想定外の事態に転がっていった方が面白くなる。その典型のようなものだった。